

博士学位論文審査要旨

2012年7月16日

論文題目: Representations of Masculinity and Homosociality in Cold War
America: The Beat Generation and Male Homosocial Bonding
(冷戦期アメリカにおけるマスキュリニティとホモソーシャリティの表
象-ビート・ジェネレーションと男同士の絆)

学位申請者: 水島 新太郎

審査委員:

主査: グローバル・スタディーズ研究科教授 Gavin James Campbell

副査: グローバル・スタディーズ研究科教授 荻野 美穂

副査: グローバル・スタディーズ研究科准教授 Fanon Che Wilkins

要旨:

This dissertation seeks to provide an answer to a deceptively simple question: what does it mean to be a man? The answer, as Mr. Mizushima points out in this thoughtful dissertation, depends very much on where and when you live. For the disaffected American writers and poets of the 1950s known as the Beats, masculinity was both a threat and a liberation: a threat because the larger Cold War society demanded conformity to a particular kind of militant masculinity, and a liberation because by refusing to participate in this narrow definition of masculinity the Beats offered a bold critique of Cold War society. The Beats' creativity, then, lay not only in their literary innovations but also in the way their lives and their practice of homosocial relations opened up new ways to be a man and new ways to be human. Mr. Mizushima finds a place for his study in the tight intersection of context, text and theory and creates a stimulating work of literary and cultural analysis.

This dissertation is divided into an introduction, three chapters and a conclusion. The introduction examines the larger significance of the project, locating it in the intellectual context of Cold War historiography and the field of gender and masculinity studies. In the first chapter Mr. Mizushima takes up the issue of male homosociality, comparing typical Cold War male homosocial pastimes, many of them playing out themes of aggression in team sports, with those of the Beats which often revolved around acts of compassion toward each other and the socially marginalized. The second chapter considers Beat sexuality, in particular the flowing continuum that broke down rigid barriers between heterosexuality and homosexuality. The final chapter takes up the issue of the place of women and ideas of femininity within the male homosocial world of the Beat writers. A conclusion reinforces the main themes, deftly pointing out that from the seemingly narrow confines of a gender identity, the Beats expanded masculinity into a vision of a more just and inclusive society.

Mr. Mizushima succeeds not only in illuminating the homosocial world of the Beat writers, but in a larger sense he also demonstrates the possibilities of cross-fertilizing literary studies

and gender theory. Thus, not only for the value of its specific findings, but because this is an ambitious study with implications for other fields of literary and theoretical endeavor, Mr. Mizushima is to be congratulated for an original and stimulating work.

よって、本論文は、博士（アメリカ研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2012年7月16日

論文題目：Representations of Masculinity and Homosociality in Cold War
America: The Beat Generation and Male Homosocial Bonding
(冷戦期アメリカにおけるマスキュリニティとホモソーシャルリティの表
象-ビート・ジェネレーションと男同士の絆)

学位申請者：水島 新太郎

審査委員：

主査：グローバル・スタディーズ研究科教授 Gavin James Campbell

副査：グローバル・スタディーズ研究科教授 荻野 美穂

副査：グローバル・スタディーズ研究科准教授 Fanon Che Wilkins

要 旨：

Mr. Mizushima's dissertation was examined by the full dissertation committee on June 29, 2012, from 15:00 to 16:30. Mr. Mizushima began with a forty-five minute oral presentation in English of his dissertation. Using Powerpoint, he surveyed how he became interested in the Beats, how he found the critical lens for his own dissertation, how it differs from previous work on the topic, and what he considers his most significant findings. This oral report was then followed by a lively period of questions in English from members of his dissertation committee. Particularly helpful were questions from Drs. Ogino and Wilkins, whose various expertise in the time period and in gender theory helped advance Mr. Mizushima's argument in nuanced directions. At the end, there was complete consensus among the three committee members that Mr. Mizushima had effectively expressed the main goals of his research and had effectively answered questions posed to him during the question and answer period.

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： Representations of Masculinity and Homosociality in Cold War America: The Beat Generation and Male Homosocial Bonding
(冷戦期アメリカにおけるマスキュリニティとホモソーシャルリティの表象 — ビート・ジェネレーションと男同士の絆)

氏名： 水島 新太郎

要旨：

本研究は、1950年代ニューヨークにおいて前衛的な文学運動を展開し、主流文化の既成概念や順応主義の蔓延した当時のアメリカ体制社会と対立関係にあったビート・ジェネレーション作家たちと、彼らの男同士のホモソーシャルな絆を基盤とした生活様式を分析の範疇に、冷戦期アメリカにおける男らしさの表象を考察する。

冷戦初期のアメリカは、米ソ間を中心としたイデオロギーの対立とはべつに、国内における権威主義が人々の目に見えるかたちで顕在化した時代であった。反共産主義を筆頭に、マッカーシーの赤狩り、ローゼンバーグ夫妻の死刑、非米活動の禁止など、物質的豊かさの恩恵によって安定された個人の生活の内実が信じがたいほどに偏狭で体制順応的であったのもこの時代の特徴である。そのような抑圧下の時代において、異性愛、両性愛、同性愛者の男性たち（さらには、自己を「男性化」した女性として捉えたビート世代の女性たち）が共存し、互いの差異を認め合い、知性を尊重し愛したアウトロー集団ビート・ジェネレーションを考察することは、当時の分裂症的に遊離した周縁文化（ゲイ、黒人、麻薬、セックス文化など）を考察する上で重要な意味を成す。従来フェミニストらの訴えてきた「男性史」が、政治家や国民的英雄といった偉大な男性たちを描いた歴史であり、そこに周縁化された男性たちの歴史や経験は描かれていなかった、と男性史家マイケル・キメル (Michael Kimmel) が示唆しているように。

ビート作家の多くは、社会逸脱、体制批判の精神のもと、厳格な冷戦時代の社会規範からすんでドロップアウトし、自分自身であることの意味を文学、絵画、音楽、朗読に求めた。彼らの作品（テキスト）と人生（コンテクスト）に描かれた男の経験は、これまで偉大な男性たちの陰に埋没してきた周縁化された男性たちの歴史を再度掘り起こし、従来の男の歴史に対する新たな認識を喚起する。そして、そのような冷戦期における周縁化された男性たちの代弁者こそ、ビート・ジェネレーションであったと考える。本研究では、ビート・ムーブメントの草分け的存在であったジャック・ケルアック (Jack Kerouac)、アレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg)、ウィリアム・S・バロウズ (William S. Burroughs) の作品と人生に焦点をあて、冷戦期アメリカにおける非因習的男らしさの表象を考察する。

ジェンダー概念が常に性の力関係を示唆してきたように、周縁文化やその文化内に属する者は、この力関係において「強さ」と対極の立場にあり、歴史的に排除の対象として扱われてきた。では、周縁文化の代弁者であるビート集団の社会的立場はこの「強さ」の対極にある「弱さ」を表象しているのだろうか。彼らの反権威主義的姿勢を斟酌すれば、「弱さ」という概念が必ずしも周縁に追いやられた者と同義でないことが明らかとなる。ここでは、軟弱性、恐れ、無気力といった否定的意味を内包する「弱さ」という言葉ではなく、「脆さ」という言葉に着目する。ジャック・ケルアックが生涯苦しんだアルコール依存、アレン・ギンズバーグの葛藤した自己の同性愛性、ウィリアム・バロウズの麻薬依存、これらすべてが示唆するように、彼らの社会的に逸脱した行為は「弱さ」ではなく、「脆さ」という言葉で換言できる。弱者は強者によって打ちのめされ、その力に屈服することを強いられるが、ビート作家の多くは脆弱でありながらも、強者で

あった冷戦体制社会に不条理という狂気をもって対立したのだ。そのような「脆さ」に着目し、ここでは彼らの提示した男らしさを「脆弱の男らしさ」(“a masculinity of the vulnerable”)と呼称する。

規範的男らしさを基盤とした順応主義下の冷戦期アメリカ社会と対立関係にあったビート集団に内在した男らしさは、規範に対する反発という点で、男性的な強さを暗示する。しかし、ビート集団における性差を越境した男同士のホモソーシャルな絆が示唆するように、脆弱の男らしさはむしろ周縁化された男性たちを結束という名のもと統合する。そこでは、政治的、肉体的強さに付随した力関係ではなく、互いの疎外化された社会的ステータスに対する同情的な男同士のネットワークが機能し形成される。ここに肉体的「強さ」の顕示に重きを置いた冷戦期の規範的男らしさと、互いの脆さに対する同情精神を基盤に形成されたビート集団の非規範的男らしさの間にある差異を認識できる。つまり、ビート集団における男らしさは男性的強さの誇示ではなく、脆くてもいまでも崩れ落ちそうな男性たちの結束を維持しようとする連帯意識からくる精神的強さを表象しているのである。

概して、本研究は冷戦期アメリカにおける周縁文化を代表するビート集団に着目し、彼らの性差を越境した男同士のホモソーシャルな絆が冷戦下の規範的男らしさの再形成においていかに重要な役割を果たしたかを論じる。1960年代に入り、ビート集団の築き上げた非因習的男らしさは、男女の区別が多義化したヒッピー・ムーブメントに脈々と受け継がれ、さらにはミック・ジャガー (Mick Jagger) やデビッド・ボウイ (David Bowie) ら、英国における規範的男らしさの定義に変革をもたらしたアーティストたちに影響を及ぼすなど、その勢いは国境を超える広がりを見せていた。この現象こそ、ビート集団がいかに他の周縁文化とは弁別的であったかを物語る。ビート集団は、周縁文化に位置しながら、西欧の主流文化に多大な影響をもたらし、また、他者と異なっていることを罪同様に見做す傾向にあった冷戦期という時代において、言外の性的エネルギーをもって多様な男同士の親密な関係を呈したのだ。